

[成果情報名]イチゴ「ゆめのか」地床暗黒低温処理栽培の定植遅延時の液肥施用効果

[要約]イチゴ「ゆめのか」の地床暗黒低温処理栽培において、定植適期から7日程度の定植遅延が生じる場合、暗黒低温処理終了後速やかに液肥を施用することで頂花房の収穫開始時期の遅れおよび年内収量の減少を軽減できる。

[キーワード]イチゴ、ゆめのか、地床暗黒低温処理栽培、定植遅延、液肥

[担当]長崎県農林技術開発センター・農産園芸研究部門・野菜研究室

[代表連絡先]電話（代表）0957-26-3330

[区分]野菜

[分類]指導

[作成年度]2017年度

[背景・ねらい]

イチゴの地床栽培では、定植前の降雨により圃場の準備が遅れ、適期定植ができない場合がある。そのような中、本県におけるイチゴ「ゆめのか」の主要作型である暗黒低温処理栽培では、処理終了時の定植適期から7日定植が遅延することにより、収穫開始時期の遅れや年内収量の減少を招き、その影響は地床栽培で大きいことを報告した（長崎農技セ、2014）。

そこで、定植遅延時の液肥施用が収量低減を抑制する効果について検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 総収量は、定植が適期から遅延しても同等となる。年内収量は、適期定植に比べ定植遅延時に液肥を無施用および定植時に液肥を施用した場合減少するが、出庫後速やかに液肥を施用すると同等となる。早期収量は、適期に比べ定植が遅れた場合のいずれの処理でも高い傾向となる（表1）。
2. 頂果平均収穫開始日は、定植が遅れた場合のいずれの処理でも頂花房は適期に比べ遅い傾向となるが、第1次腋花房は早い傾向となり、1月下旬～2月の株当たり収量が高くなる（表1、図1）。

[成果の活用面・留意点]

1. 8月6半旬入庫の暗黒低温処理栽培で、頂花房の花芽分化を確認した後、定植が遅れが生じる場合において適用する。
2. 地床栽培において、畦幅135cm、株間は2015年23cm（640株/a）、2016年25cm（590株/a）、加温（7℃設定）、電照の条件で行った試験結果である。
3. 育苗は、雨よけ高設育苗施設で行った。暗黒低温処理は、両年とも8月26日入庫、9月10日出庫で、定植は2015年は適期9月11日、遅延9月18日、2016年は適期9月13日、遅延9月19日である。収穫終了日は、各年翌年の4月30日である。
4. 頂花房および第1次腋花房は株当たり13果程度、第2次腋花房以降は果梗枝当たり4～5果に摘果した。

[具体的データ]

【試験区の構成】

区名	略記	処理内容
※ 共通：冷蔵庫出庫後，暗所で馴化し，翌朝雨よけ高設育苗施設へコンテナのまま移設.		
定植遅延	遅延	以降定植まで灌水のみで管理.
定植遅延+出庫後液肥	遅延+出液	2015年は移設当日，2016年は移設翌日に液肥（N-8%）500倍液を100cc/株施肥し，以降定植まで灌水のみで管理.
定植遅延+定植後液肥	遅延+定液	以降定植まで灌水のみで管理し，定植直後液肥（N-8%）500倍液を100cc/株施肥.
適期定植（対照）	適期	冷蔵庫出庫後，暗所で馴化し，翌日定植.

表1 「ゆめのか」暗黒低温処理栽培における定植遅延時の液肥施用と収量

試験年次	区名	定植日	総収量 (kg/a)	うち		頂果平均収穫開始日 ^y	
				年内収量 (kg/a)	早期収量 ^z (kg/a)	頂花房	第1次腋花房
2015年	遅延		486 ns ^x	130 bc	219 ns	11月22日±1	2月6日±4
	遅延+出液	9月18日	494	142 ab	235	11月20日±1	2月2日±3
	遅延+定液		463	118 c	218	11月24日±1	2月3日±3
	適期	9月11日	525	154 a	212	11月16日±2	2月12日±4
2016年	遅延		504 ns	94 b	259 a	11月23日±2	1月31日±3
	遅延+出液	9月19日	538	104 ab	252 ab	11月20日±1	1月31日±3
	遅延+定液		538	101 b	252 ab	11月20日±1	2月4日±4
	適期	9月13日	506	119 a	204 b	11月17日±2	2月12日±5

z：2月末までの収量， y：±は95%信頼区間の幅，

x：同列，同年のアルファベット異文字間には，Tukeyの検定により5%レベルで有意差あり．nsは有意差なし．

n=8株*3反復

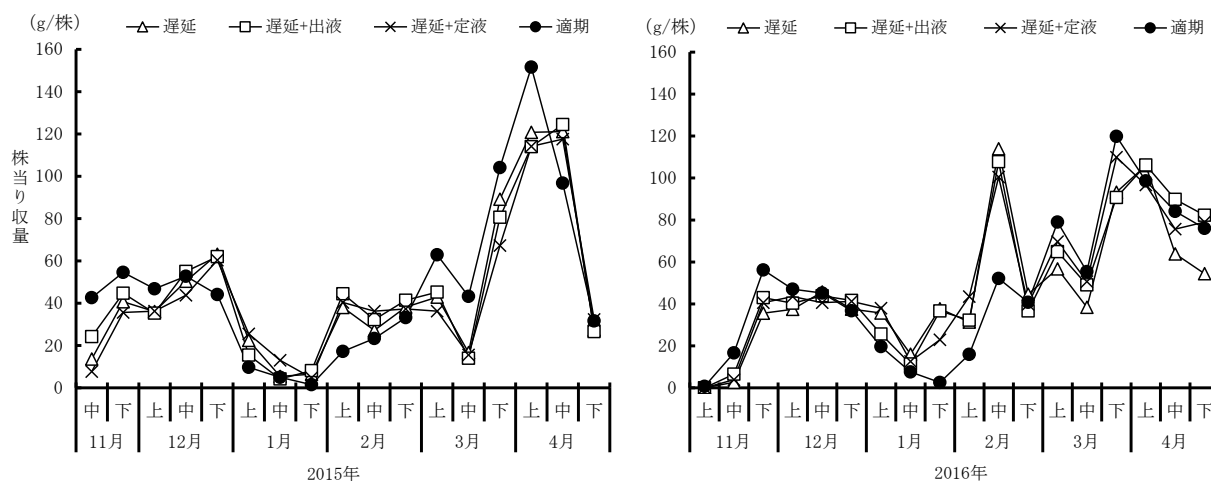


図1 「ゆめのか」暗黒低温処理栽培における定植遅延時の液肥施用と旬別収量

[その他]

研究課題名：イチゴ次期有望品「ゆめのか」の安定生産技術の確立、単収日本一を目指したイチゴ「ゆめのか」の増収技術開発

予算区分：県単

研究期間：2013～2015年度、2016～2018年度

研究担当者：野田和也、前田衡、松本尚之